

令和 6 年度 第 1 回 川崎市岡本太郎美術館部会 会議録

■日時 令和 6 年 10 月 31 日（木）14:00～15:50

■場所 川崎市岡本太郎美術館 創作アトリエ

■出席者

委員 杉浦幸子、長門佐季 [オンライン]、橋本善八（部会長）、藤嶋俊會

事務局 土方（館長）、佐々木（副館長）、佐藤、重森、片岡、石原、喜多、加藤、
細川、澁谷、千村、鈴木、井上（市民文化局市民文化振興室）
小山（指定管理者）、山内（指定管理者）

■傍聴者 0 名

■議事

・令和 6 年度 事業経過及び予定について

- 1 展覧会事業
- 2 資料収集・整理、調査研究
- 3 作品の保存・修復、貸出
- 4 普及企画
- 5 広報活動
- 6 施設・設備の整備
- 7 その他

・その他

■議事録

○開会

【土方館長挨拶】

【配布資料確認】

【会議公開・議事録作成に関する説明】

事務局より全委員の半数以上である 4 名出席により、会議の成立を報告。
傍聴希望があった場合、公開とする旨を確認。

【橋本部会長挨拶】

【事務局より議題 1（展覧会事業）について説明】

藤嶋委員： 企画展についてだが、太郎さんが何を好きだったか、グルメとかが出てくるかと思ったがそれが少し足りないと感じた。食の社会、イベント・ワークショップ、たくさんあってとにかく人が集まってという感じであるが、太郎さんの家庭、一平もかの子も食に対しては食いしん坊であったと思うので色々食べていると思う。なので、魯山人とか池波正太郎みたいな感じを先入観みたいにしていて、食器とかデザインというのについては岡本太郎の仕事だとは思ったが、その辺が足りないと思った。企画の段階でその辺のアイディアはどうであったか。

事務局： 今回は、作品の紹介を幅広くしたいというところがあったが、藤嶋委員のおっしゃるようなところについては、もう少し突っ込むところがあったと思う。魯山人については実験茶会の紹介のところで写っているというだけで、こういう人と関係があったのであろうなという程度になっている。今回は一般的に分かりやすく紹介することをメインに置いていたので、次に「食」を取り上げる機会があれば、もう少し突っ込んで調べたものを紹介することも出来るかもしれない。ただ、作品や資料ということを見ると、今回の展覧会は当館の所蔵作品で作ろうということでスタートしているのでその辺の限界があったのかと思う。

杉浦委員： 食の展覧会を拝見した。普段だったら太郎さんといえば芸術は爆発だというようにアーティストとしての力強さみたいなものを感じる人が多いと思うが、今回は食がテーマだったということから、別の人間性というか人柄というかが出ている。いわゆる一般人が見る、アートでない雑誌に出ているというところが太郎さんの素晴らしさというかすごさだと思う。美術手帖・芸術新潮・みずゑなどの美術関係の人が見る雑誌じゃないところに「食」ということで声もかかるし出ていくというところで、来館した人に新しい太郎さん像を感じさせるところがあったのではないかなと思う。自分はお茶をやるのでお茶碗は、非常に興味深く感じた。京都の大本教の資料館にちょっと似たような不思議なエネルギーを感じさせるお茶碗がある。それを思い起こさせるような、太郎さんならではの茶碗だなと感じた。絵画作品と食に関する写真、そして陶芸的な作品と展示してあって緩急があって自分としては楽しめたし、興味を持てた展覧会であった。夏の展覧会については、太郎賞の作家さんが来てくださって直接の接点を持つということは、作家や見る側のどちらにとってもとても重要なのでそれを創出しているということが、派手ではないがとても重要で良いと思う。

常設展については、充実していて見る事が出来て良かった。毎回、切り口を考えるのが大変だと思う。夏の展覧会は残念ながら見られなかったが、見た展覧会については非常に刺激をもらった。

藤嶋委員 杉浦委員がおっしゃった様に常設展も企画展も考えるのはとても大変だと思う。企画展については、去年開催した顕神の夢は巡回展でもあり、かなり前から準備が必要であったであろうし、また、岡本太郎に関わらせな

くではないということもある。それに対し浅井さんと福田さんの描き方はかなり違うと思う。この美術展でやるには、二人展ではなくて岡本太郎と3人という風に考えなければならない。二人が合うのではなくて岡本太郎と合うかということも考えなければならない。そういう苦労はあると思う。今後、すぐには出来ないにしてもどこかで顕神の夢の様な大きな展覧会を準備するということはあるのかと期待している。企画展を25年もやって来たので、過去のストックは出来たがこれからも同じように色んな企画をやっていかなくてはならない。これから先が大変だと思う。常設展とは違う難しさがあると思う。25周年を迎えこれからどういう展望を持っているか知りたい。

館長： 25年間、今までやってきたこともこれからやっていくこともあまり変わらないと思う。というのは、岡本太郎は、現代、今の作家であり作品であるという位置づけで、時代と共に捉え直すことが出来る作家であり作品であると考えている。個人美術館では、過去の位置付けられた、また、価値が決まった作品を回顧するという美術館も多いが、ここはそうではなく、常に現代に問うており、そのために現代作家との連携、コラボレーションがすごく大事だと考えている。同時に、すでに岡本太郎の周知されている作品も見方や切り口によって新たに捉えることが出来るということを紹介する。それを大前提として、25周年を迎えたこれからも色んなことを考えていきたい。

長門委員： 「太郎の食」展は多様な太郎の側面を様々な角度から見ていく、アプローチをしていくという企画。企画展と常設展があってそのバランスで、太郎を知っている人もいない人もいる中で、「食」というある種の意外性を切り口にそこから深めるという企画を常設展が補うという上手い形が出来てようになっていた。また、全体に暑い夏を皆さん熱く色んな活動をされて来られたのだなと感じた。今は展覧会というものだけでなく様々なイベントとか現在活躍中の作家さんとの接点ということも大切なことなので、その辺は面白い。今後、さらに違う展開で、現在の作家と岡本太郎をどういう風に結びつけて未来に繋げていかれるかということが大変興味深い。

橋本部部长： 個人名がついている美術館はテーマ設定が大変だと思う。世田谷美術館も分館3つに個人名がついているので大変。30年やっていて以前は年4回、今は予算の都合もあって年2回企画展をしているがなかなか難しい。昨年はスポーツをテーマにやられていたが今回はその流れという事か。

館長： 岡本太郎は美術という狭いジャンルで位置づけようとするとはみ出してしまう。そのはみ出してしまうところを逆に切り口というか引き出しの多さという風に考えて、食であろうがスポーツであろうが音楽であろうが何でも岡本太郎のテーマになるということが強みであると考えている。

橋本部部长： 「食」はとっつきやすいテーマ。よほど事情がない限り食べない人はいないので面白いテーマであったと思う。入場者数も多く、夏の暑い時に1日当たり287.3人はすごい数字だと思う。カフェとのコラボは多くやってい

るのか。

館長： 毎回やっている。岡本太郎美術館はいわゆるホワイトキューブの中で作品を静かに見るという美術館ではない。特にこの夏の展覧会については参加型を目指して担当が考えてくれた。

橋本部会長： いろんな人が集まっていと思う。

浅井氏のボランティアの 44 人というのは延べ人数か。

事務局： 延べではなく参加いただいた方の人数。1 日平日は 5 名、休日は 7・8 名位としてシフトを組み繰り返し来てもらった。

橋本部会長： レポートには延べ人数も記載した方がよい。

TARO 賞に関してだが 579 の応募があると言っていたが、増減はどうか。

事務局： 過去 5 年間だと各年での増減がかなりあるが、ほぼ平均的な数字といえる。

館長： TARO 賞に関しては主催が美術館だけではなく著作権者の記念館もいるので、自由にコントロールできない部分がある。以前はオンラインでの応募を認めていて増えていたが、今回はもう一方の主催者の意向でオンラインを認めなかった。当初かなり厳しいのではないかと館内では危惧していたが、意外と資料を作るという手間を乗り越えて応募してくる熱心な方たちが 600 名近くおり、担当も安堵しているところである。

橋本部会長： 今、Web 上で応募することが普通になって来ているが敢えて紙ということか。

館長： 記念館としては安易な応募は認めたくないという意向があって、熱量を測るためにもちゃんと資料を作って郵送で送ってくるものを観たいということであった。結果的に 600 近い応募があって良かった。

杉浦委員： 今回の浅井さんや福田さんなど、作家さんはどうやって決めているのか。

館長： まず、大前提として岡本太郎と関連付けられる現代作家というのをいつも考えている。と同時に企画展で人数を絞った作家を取り上げるときは、ある程度現在第一線で活躍している作家を選びたいと思っている。かなりの人数を上げてその中で館内の学芸で検討して実際できそうだという作家を絞り込んで作家に打診する。今回の場合、浅井さんも福田さんも岡本太郎だったらやりたいと言ってくれた。二人ともタイトなスケジュールだった。浅井さんは直前までインドで地上絵を描いていたし、福田さんも名古屋市美術館で個展をしていた。しかし作家には限られた時間をフルに活用していただいて、担当学芸員も驚くほどの熱量で会場を作ってくれた。岡本太郎は吸引力というか作家を鼓舞する力があるなというも思う。

杉浦委員： 浅井さんがやりたいとおっしゃるのはよくわかるが、自分の中で福田さんと太郎さんがビシッとくるということがなかったのが、福田さんを選べたのは今回すごいなと思った。また、展覧会を拝見して福田さんの感応力というかアンテナの立て方がすごいと感じたし、それとがつつり組んでいる太郎さんが亡くなられているとは思えないくらいであった。アートキャ

ンプの方は TARO 賞の作家なので、リスペクトの気持ちがあるというのはわかる。展示室が楽しそうで、アートキャンプという名前なのでお泊り会とかできたら楽しいだろうなと少し思った。

事務局： キャンプをやりたいという話は出たがなかなか実現は難しかった。ただ作家が展示室に常駐してくれたのでお客さんと非常に近いところでコミュニケーションが取れていた。音楽イベントでサンバをしたが非常に盛り上がった。

橋本部会長 色々なテーマで開催すると収蔵品の活用に結びつく。こういう切り口のテーマでないと出てこないという収蔵品もあるので、多いに活用し、それにより新しい展開があると思うので頑張っていたきたい。

【事務局より議題 2（資料収集・整理、調査研究）から議題 8（その他）について一括して説明】

杉浦委員： クラウドファンディングに参加した。参加できたのもよかったしお礼状が来たのも嬉しかった。ただ、1 点、今後再度行うことがあったらお礼の特別内覧会を週末にしてほしいと思った。金曜だと仕事をしている人が行くことが出来ない。展覧会が始まる前でなくても良かったのではないかな。一般の方は内覧会がどういうものか知らないし参加できるのは晴れがましい気持ちだと思うので、多くの人が参加できる方が次にもつながるし良かったと思う。

教育普及に関してはいつもしっかりやっているとと思っている。特に夏の暑い時にもいろんな方たちが参加されている。先程説明のあった新しい対象者について、特に認知症についてだが、近隣の方、例えば通所のデイサービス等との関係はあるのか。

事務局： 昨年開催したときは、岡本太郎美術館はアクセスが厳しい事もあり、症状の重い方は難しいということで若年性の施設に声をかけて、4 組来ていただいた。今年も同じような形で若年性の施設と他にも少し広げて案内をしたが、興味のある方がいるという事ではあったが、日程が折り合わなかった。

杉浦委員： そうなると、美術館から日程を施設に合わせるというかたちでないと難しい。日程をいくつか出して施設に選んでもらう方法が来てもらうにはいいのかと思う。

事務局： 施設の都合にあわせるのが、イベントが開催できる可能性としては高いと思う。一方でその場合、その施設を利用している方がまとめて来られるような形でないと、個別で少人数では難しいとの意見を施設からいただいている。当館はボランティア等の体制がなく職員だけで対応するので人数に限りがあり、一度に多い人数の受け入れが難しい。開催の仕方や呼びかけの仕方が難しいという部分があるということを実施しながら感じた。

橋本部会長： 広報効果というか、美術館が開かれているということ伝えるためにもチラシにのせるなどあったらいいが、出しているか。

事務局： はい。出している。

杉浦委員： 参加者がいなくとも取り敢えずチラシで広報してみる。その日がダメでも、それを見て問い合わせがあるかもしれない。そこにフレキシブルに対応する。実際に認知症の人が美術館に行くのには、周りが連れてきたいなと思って大変だと思うので、やり方としてはそういう方法を取っていくのがいいと思う。

視覚障害用の作品カードについて思ったことだが、昨今点字が読めない人が若い人に増えてきている。説明書きだけでも音声を録音したようなもの、例えば QR コードを読み取って聞けるようなものがあったもいいのではないか。

事務局： 無料の音声ガイドが使える。

杉浦委員： 音声ガイドとは別にこの作品紹介カードの解説の音声があるといい。解説の内容が点字と音声と両方あり、絵は触れるというように。

橋本部長： QR コードみたいなもので出来るといい。

事務局： 視覚障害者用の方用の読み上げソフトがある。そういうソフトの活用等も検討していきたい。

橋本部長： QR コードがついていて音声ガイドに結びつくようなチラシがある。触知図等は実際に作るとなると、本当に分かってもらえるかどうかというところもあり、点字以上に難しいと思う。

杉浦委員： ただ、このようなものを作ってもらっているということで嬉しいという気持ちも喚起され、気にしてもらえているということだけでも嬉しいと聞く。

事務局： クラウドファンディングを実施したことが大きいと思うが、実際に視覚障害の団体や点字図書館等から団体で訪問したいという問い合わせが増えていく。また、近隣の小学校の P T A からブラインドコミュニケーターと一緒に館内見学をしたいという申込もあり今年度対応する予定である。そのような広がりが出てきていると思う。

杉浦委員： 広報ということにもなると思う。

事務局： 先日の特別内覧会にも、全盲で寄附をしていただいた方がいらしていて、その時にパンフレットや作品紹介カードを紹介した。その方は点字が読める方で実際に触れられて、「こういうものがあると助かる」という生の声をいただいた。

藤嶋委員： 25 周年でなにかまとめるとか記念にドキュメントを作るといったことはないのか。

事務局： 20 周年の時に作成したので今回は考えていない。

藤嶋委員： 20 周年の時は北條氏が振り返っており、美術館の最初の頃の自然環境に関する苦労というのがあったが、あの時とは違っているか、特にもう問題はないのか。

館長： 制約は様々ある。自然保護という観点から、木一本切るのにも自由には出来ない面もある。生田緑地は市民協働という立場でやっている。最初は岡本太郎の美術館はなんだという意識から始まったが、現在は生田緑地に溶け込

んで、逆に生田緑地の魅力を高める施設の一つとして認知されるようになってきている。お互いウィンウィンの立場になってきていると思う。

事務局： 工事に反対されていたかたも今では美術館に來られていたり広場を使ってイベントをされていたりと、今は良好な関係が出来ているのではないかなと思う。

館長： 環境といえば問題はアクセス。來館者で遠くから來る方には、駅から遠いというのは致命的。世田谷美術館も同様に苦勞されているところがあると思うが如何か。

橋本部会長： アクセス改善といっても立地の問題なので、物理的でどうにもならないものがあるが、來てみたら一日楽しいとか、不便だけど環境が良いとかそういう良さを森の中の美術館が集まって考えられたら面白いと思っている。

長門委員 インクルーシブの事業が今すごく重要視されていてそういう中で色んな取り組みをされているということで、大変ではあるが重要なことをされていると思う。当館（神奈川県立近代美術館）もやっているが、ニーズに答えるためには、予算や人員等、通常に展覧会を観ていただくよりはるかにかかってくる。今いる美術館の人員のみでやっていくのは大変だと思うので、その辺りは市の方でもやっていただきたい。より幅広く充実した活動をするためには、美術館だけでやるというのでは限られてしまうし、手間も非常にかかり苦勞されているところだと思うので、市の活動としても検討したらよいと思った。

橋本部会長 普及の事業はすごく丁寧に行われていると感じた。普及は長く時間をかけて種まきをすることが大切で、手を抜くと将来育たない。良い鑑賞者と良い岡本太郎ファンを育てるというのはとても大事な事業。それに付帯しているのは、今の世の中では広報で、以前に比べて広報を幅広く展開されている。広報とその反応をどう受け止めて分析するかというところで、今後の館の運営のあり様が大分変わってくるのではないかなという気がした。広報の報告を聞くとかなり範囲を広げているし、充実度が高まっているという印象を受けた。

施設改修について、美術館施設整備事業に 2,070 万円の設計料がついているが実際にこれは進んでいるのか。

事務局 まちづくり局で実際は進めている。今年度来年度にかけて設計を行っていく。

橋本部会長 設計は決まったのか。

事務局： 契約はまだで、これから入札になる。

橋本部会長 今、入札が不調になることが多い。どういう結果になってもその経緯について教えて欲しい。当館でも不調になったりして苦勞をしている。2024 年問題の影響がすごく広がっていて今までにない様な状況が発生しているのでぜひ情報交換をしていきたい。

とても充実した活動をされていると思う。先程出ていた QD レーザの支援機器については、当館（世田谷美術館）でもこれから導入を予定している。

また、当館では全ての講演会に手話通訳を入れていて開催している。常連となっている人がいる一方、なかなか広がらない。やるということがまず大切だが、その後、どうやって参加者を増やすかが難しい。認知症の方もそうだし視覚障害の方についてはもっとハードルが高くなる。全盲の方で美術館に一人で来館するというのはものすごく上級者だと聞くと、実際にそういう方をどのようにサポートするかというのが課題。お金も人手もかかる。これからの高齢社会で65歳以上の方の比率がどんどん上がっていくわけで、それは入館料という収入にも影響するし、多くのサポートも必要になってくる。そういう事も含めて、これからの時代、10年20年先の社会構造を見据えて準備していくことが必要だと感じた。

【その他】

館長：

今日の中心的課題の一つに、美術館の多角経営みたいなことがある。今までには展覧会や教育普及をやっていればいいということであったが、時代がそうではなくなっている。「アートフォーオール」という言葉が少しずつ浸透し始めてきていて、それに美術館がどう対応するかが課題になっている。杉浦委員のおっしゃたことで参考になったのは、まず色んなことをやるということは美術館が開かれているという姿勢を示すということであるということ。これはすごく大事なことだと思う。ただ、人とお金が限られていて今後増えていくということが望めないという中で、例えば障害者に対する教育普及活動を、美術館が率先してやるというのは無理がある。各事業者との連携あるいは各事業者の強い要望そして協力ということが必要になる。美術館側から何をやるということではなく、美術館が時代の要望をキャッチしてその協力体制を取るということが重要と思う。これは、橋本部長がおっしゃられたように、ごく限られた人数への対応となる。しかし、それにかける美術館の人的な問題もあり、一般の方を断らないといけないということが出ない様にしなければならない。なるべく開かれた美術館であると同時に効率性ということも念頭に置いていかないと美術館の経営はなかなか難しいと考えている。

杉浦委員

先日、「独立展」で自分が実施した赤ちゃんのプログラムに参加した方が、次に岡本太郎美術館のプログラムに行くといっていた。8組ぐらいあれば効率性の問題からいっても行う意味があると思う。その方に聞くとXで情報収集をしていて、自分のプログラムも岡本太郎美術館のプログラムもXで見つけたと言っていた。広報との上手い連携が大切と思った。

館長

当館のスタッフは、展覧会もさることながら教育普及も広報も非常に意欲的にやってくれている。その意欲を持ち続け進めていけるよう頑張りたいと思っている。

○閉会